

「平和」のりれい

大府市立大府南中学校

二年 小林 廉



この本の題名、「平和のバトン」を見た時、「平和とは何か」という疑問が浮かんだ。それは、世界中の人々が争わずに暮らすこと、または、毎日が笑顔であふれることだろうと様々なことを思い浮かべたが、それらはどれも曖昧なものだった。しかし、本を読み進めていくにつれて、「平和」に対する考えはより深く、明確なものになっていった。

この本は、一九四五年八月六日に広島へ投下された原爆によって引き起こされた悲劇を、未来の世代に伝えていくために、被爆体験をした人達の証言をもとに、高校生達がその光景を、油絵で表現し記録として残していく、「次世代と描く原爆の絵」プロジェクトを取材した日々をまとめた実話で、証言者が原爆の落とされた日に何をしていたのか、被爆後どんな体験をしたのか詳しく書かれ、その被爆体験を聞いた高校生が描いた油絵の写真も載っている。僕がこの本を読み始めたきっかけは課題図書だ

から、程度の軽い気持ちからだだったが、体験証言の悲惨さと、高校生たちが描いた油絵から伝わってくる衝撃は、自分の中に強い関心を抱かせた。

まず感じたことは、「記憶」を「記録」にすることがとても難しいことだ。僕は絵を描くことが得意だが、見たことのない光景を言葉で聞いただけで絵に描いた経験はない。それは高校生たちも同じだったようで、最初は証言者の言っている内容がよく分からず、どう絵を描くか苦戦したそうだった。例えば「ゲートル」と言われても何のことか分からず、何度も証言者の話を聞き、当時の写真や資料を調べ、丁寧に確認していく。ゲートルとは足を守るために足首から膝までを巻く布のことだった。また、証言者それぞれの見た光景の記憶が違う。原爆の発した光を、「真っ赤だった。」と言う人もいれば「白かった。」と言う人もいるのだ。このプロジェクトを見届けてきた高校生たちの恩師である橋本先生は、

「それらは証言者が見た真実なのです。」

と言う。証言者が記憶している情景を忠実に表現し、「記憶」を「記録」として残していくには、いくつかの証言を一枚にまとめたような絵ではなく、被爆体験をした人たちのそれぞれの真実を、一枚一枚丁寧に描かねばならない。そうやって熱心に一年間という時間を費やして描き上げた絵なのだということに感激した。

次に考えたこと、それは「平和を実感するために何が必要か」ということだ。僕を含め日本人にとって平和は当たり前になっている。日本は七十年以上戦争をしていないからだ。戦争を

知らない世代が多くなり、日常の中で当たり前になった平和を、改めて実感するのは難しい。そこで、僕は自分なりに考えて、「平和を実感する」ためには、三つの言葉が重要になるのではないかと考えた。

一つ目の言葉は、「感謝」だ。僕は何かを人にしてもらった時「ありがとう」と感謝をする。その感謝の気持ちこそ、この平和な時代を作ってくれた全ての人に向けて、明るい気持ちになれるとともに、人に優しく出来る心をもてるのではないかと、思うからだ。

二つ目の言葉は「興味」だ。文中でも「人は自分に関わることにしか興味をもてないけど、関心がないことがこわい。」と書かれ「無関心であることで見落としてしまうこと」に対して、注意を促している。興味をもつことで、そのことの起源や過去、歴史を学ぶ意欲となり、学んだ歴史から自分の価値観や教養を広げ、過去があるおかげで現在の平和が保たれていることに気が付くのだと思う。

そして最後の言葉は、「努力」だ。なぜなら、感謝と興味が平和の価値を伝えてくれても、それだけでは平和を維持・拡大していくことは難しいと考えたからだ。自分自身が、平和を繋いでいく絶えぬ努力をすることが不可欠なんだと思う。この本の中でも、「平和を実感する」ために、絶えぬ努力をしている人が大勢いることに気が付く。自分で平和を感じる事が出来るという事は、何よりも幸せなことであり、そこに感謝が生まれる。その感謝が興味に繋がり、興味が学びを生み、その価値を守り継続する努力を生む。その努力を続けてくれた人

に、感謝・興味・努力のサイクルがバトンとして渡っていく。この本に書かれ描かれているのは、そういう平和の価値を知る人が、その価値に気付いていない人への「平和を知って欲しい」という切実な願いなのではないかと感じる。

平和とは何か。本を読み終えて自分なりの考えが出来た。感謝・興味・努力、それを繰り返し続けることが「平和」そのものなんだということ。この本の終わりは、「平和のバトンは今、みなさんのその柔らかな手にわたされています。」と締めくくられている。僕は戦争の無い現代の日常が、どれだけ幸せなことなのか考えて、平和のバトンを受け取り、次世代へ繋いでいく。自分が「アンカー」にならないことを強く決意して。

書名：平和のバトン 広島の高校生たちが

描いた8月6日の記憶

著者名：弓狩 匡純

発行所：くもん出版